

平成20年8月19日

石巻市議会議長 阿部仁州殿

会派名 ニュー石巻

代表者名 阿部 欽 一 郎

調 査 報 告 書

調査した概要は次のとおりであります。

記

1 調査者氏名

阿部欽一郎、阿部久一、石森市雄、安倍太郎、松川恵一、今村正誼

2 調査期間

平成20年7月15日から

平成20年7月18日まで 4日間

3 調査地

及び調査内容

○北海道釧路市

- ・くじらのまちづくり推進について
- ・釧路川リバーサイド整備について

○北海道帯広市

- ・交流センター整備について
- ・市民と一緒に作る新図書館について

○北海道旭川市

- ・北彩都あさひかわ整備について
- ・駅周辺計画及び駅周辺開発について

4 調査目的

【くじらのまちづくり推進について】

石巻市鮎川はクジラの町。クジラに関しては同じ境遇の中で「沿岸小型商業捕鯨の再開へ」、また、「クジラの食文化を広める施策（市民の集いなど）」にどう取り組んでいるか。1987年（昭和62年）国際捕鯨委員会（IWC）の商業捕鯨モラトリアム実施以降、毎年開催されているIWCの総会は、賛成国と反対国の不毛の議論が続き、商業捕鯨再開の道は閉ざされたままです。そのような中、日本の文化としての捕鯨、産業としての捕鯨が衰退の一途をたどっている現状で、かつて有数の捕鯨基地

であった釧路市の沿岸商業捕鯨再開に向けての取り組みの現状を教えてくださいという趣旨で視察を行いました。

【釧路川リバーサイド整備について】

石巻市には北上川があります。釧路市は同じ河口都市として、リバーサイド整備は共通の課題です。釧路市の計画の概要と整備実績、課題について教えてくださいという趣旨で視察調査を行いました。

【交流センター整備について】

石巻市では、市民が集う施設について、中心市街地活性化の中で浮上しています。そのような中、帯広市の交流センター建設に至るまでの経過と、現在の活動の内容、課題について教えてくださいという趣旨で視察調査を行いました。

【市民と一緒に作る新図書館について】

石巻市の図書館は築40年。新図書館の建設が叫ばれている中で、帯広市の図書館建設へのプロセスと市民参加の実態、オープン後の利用状況と今後の課題について、教えてくださいという趣旨で視察調査を行いました。

【北彩都あさひかわ整備について】

石巻市は来年秋を目標に、駅前への市庁舎移転を計画しています。と同時に中心市街地活性化に向けた取り組みが始まろうとしています。そんな中で、北彩都あさひかわ整備の主な事業の内容と経過と、既設施設の活用状況と課題について、教えてくださいという趣旨で視察調査を行いました。

【旭川駅周辺計画及び駅周辺開発について】

北彩都あさひかわ整備との関連の事業でもありますが、開発整備で市民生活や観光客の受け入れなどに、どう変化したか教えてくださいという趣旨で視察調査を行いました。

5 調査概要

【くじらのまちづくり推進について】

釧路市は1944年（昭和19年）に極洋捕鯨、1951年（昭和26年）日本水産㈱が事業所を開設し、捕鯨基地となったまちであり、かつては全国一の水揚げ頭数を誇り、日本を代表する捕鯨基地でありました。

その後、1976年（昭和51年）の操業を最後に捕鯨の幕を下ろしましたが、2002年（平成14年）の第2期北西太平洋鯨類捕獲調査の一環である、ミンク鯨の調査捕鯨により、鯨のまちとして新たなスタートを切りました。

現在、捕獲調査の目的で年間60頭のミンク鯨を捕獲していますが、市内に事業者

はなく、捕鯨船も所有していません。鮎川や他所の捕鯨船が調査にあたっており、市としての経済的効果はないとのことです。

釧路市として捕鯨への直接の関与はなく、平成17年に、漁協、商工会議所、海員組合が中心となって設立された「釧路くじら協議会」が主体となり、「各種イベント」「鯨に親しむ市民の集い」「祭」「学校給食」「小学校や大学での特別授業」「レシピ集の作製」とうの事業が行なわれています。

各種事業を行うために、3年間の時限ではありますが、北海道庁から18年度で500万円、19年度450万円補助金を受けており、20年度は市が200万円を助成しています。

最も力をいれているのは食文化の普及です。普及、啓発のための鯨肉レシピの作製や各種イベントでの「くじらかつバーガー」の販売、学校給食を年2回実施していますが、児童生徒には好評であるとのことです。

もっと給食回数を増やせないかとの質問に、豚や鶏に比べ原価が高く難しいとのことでした。

【釧路川リバーサイド整備について】

釧路市は東北海道の社会、経済、文化の中心機能を担う中核拠点都市でその市街の中心を威風堂々と貫流する釧路川は、人々の社会、生活基盤と結びついていて、地域の文化を守り育ててきたようです。また重要港湾という機能を有している干潟、ヨシ原があり、釧路湿原に通じ豊かな自然を残しています。

このように自然、文化を21世紀に継承していきたいと願いを込め、『釧路川ふるさとの川整備計画』の基本テーマを設定し、そして基本テーマの理念のもとに、災害に強く、自然環境を守り社会環境を育む整備内容が認定されました。

釧路川の整備については、市民の関心は高く、整備計画の認定に至るまで、市民参加による、ワークショップ、計画内容を検討する委員会、絵画コンクール、アンケート調査など様々な、経過を経て、平成10年6月11日に『旧釧路川ふるさとの川整備河川指定』を受け、平成12年12月には、ぬさまい（幣舞＝ぬさまい＝橋の名称から起因）広場完成、都市計画課による、河畔第1駐車場を改築、平成13年4月13日に『釧路川ふるさとの川整備計画が認定』され、平成13年11月に河畔第2駐車場改築され、整備計画から4年程で認定を受けております。

認定があまりにもスピーディで、釧路市は1989年(平成元年)7月に『釧路フィッシャーマンズワーフ』がオープンし、その連携的な事業と次々に事業が展開されていきました。全天候型緑地(EGG)と民活法第1号の指定を受けた旅客ターミナル施設(MOO)もあり、現在8メートルの深水を12メートルの深水にするための工事も行われていました。ちなみに、河川一帯は年間200万人を超える観光客、市民でにぎわっています。

釧路フィッシャーマンズワーフや旅客ターミナル施設(MOO)のオープン後は、第二次計画として事業化、調査を進め、ウォーターフロントに広がる、文化、交流、ア

メニティーゾーンの形成を平成5年6月にオープン。さらに、ラムサール条約釧路会議のメイン会場になった、観光国際交流センター、水際文化施設親水緑地、駐車場などあり。これを包括する整備基本コンセプトを『21世紀を志向する北の国の水族園』としているようです。

1973年(S48年)末広地区市街地再開発基本計画でリバーサイドパーク整備計画を提案し、12年後(S56年)に釧路青年会議所が釧路観光漁港ショッピングセンター構想を提案、2年後には釧路市緑のマスタープランにリバーサイドパークを位置づけました。

その後1981年(平成元年)には、北海道開発局と北海道が釧路川水系環境管理基本計画及び釧路川水系空間管理基本計画を作成、1992年(平成4年)「釧路川河川環境整備推進協議会」を、釧路開発建設部、釧路土木現業所、釧路市、釧路町で設立、1994年(平成6年)『釧路市がリバーサイド整備基本構想』を策定、1995年(平成7年)に釧路川整備を考える市民懇談会が開かれ、同年には市議会に『リバーサイド整備推進特別委員会』が設立され、行政、議会、市民の3つの組織で話し合ったそうです。

そして2年後の1997年(平成9年)リバーサイドパーク基本計画策定し1998年(平成10年)『ふるさとの川整備事業』の整備河川の指定を建設省から、2000年(平成12年)整備計画検討委員会で『ふるさとの川整備計画』の策定。2001年(平成13年)国土交通省の河川局長より、ふるさとの川整備計画の認定をいただいたといえます。

その後、市民参加の釧路川ふるさとの川推進懇談会の開催。2003年(平成15年)市議会のリバーサイド整備推進特別委員会が解散。2006年(平成18年)内閣府の認定により、まちづくり交付金事業の導入により、市民の提言でまちづくりを行なっています。

【交流センター整備について】

市民活動交流センターの事業主体、目的、開設までの経過、設置内容、管理運営、管理運営費、利用状況、今後の課題等について説明後、現地に入り調査致しました。

まず、事業主体は帯広市であり、市民活動交流センターは、世代や地域を越えた市民の活動と交流を支援し、これらの機会を活かし、中心市街地の活性化と市民協働のまちづくりを推進する為、計画されました。

市中心部の商業施設(藤丸デパート)において、フロア再配置計画により最上階のフロアが余剰になったことから、そのフロアを借り上げて、これまで市民から要望のあった中心市街地における市民活動の拠点施設として、最適であると判断し平成18年10月1日の開設にいたしました。

また、設置内容は百貨店8階フロア(床面積985㎡)を市民交流ホール、多目的活動室、高齢者活動室A・B、子育て活動室A・B、市民活動会議室、市民活動情報室、

市民活動作業室、市民サロンの10区画に区分され、世代を問わず利用しやすい配置になっていました。しかも、8室の区分の実設計は、専門業者ではなく内部設計を知り尽くしている、藤丸デパートに委託（委託金1,575千円）し、設置工事委託費は49,350千円、備品購入費5,813千円と、最小の経費で完成致しています。改修経費を抑えられた理由を挙げると、実設計は内部をしっかりとっている藤丸デパートに委託したこと、もう一つは、備品を古い図書館から安くゆずり受けたことが上げられます。

センターの管理運営は、嘱託職員4名と臨時職員4名によって、嘱託職員・臨時職員各1名の2名体制でのローテーションで運営され、使用許可事務・備品等の貸出し、その他センターの管理を行なっていた。また、市民活動情報室では、週3日（月、水、金）市民活動にたいする情報提供等の支援を行なうため、市民活動アドバイザーを配置し、市民の利便税を図っておりました。管理運営費は、32,704千円で、内訳はフロア賃貸料21,456千円、管理運営費11,248千円で、その内人件費が6,023千円となっており、管理運営費が低く抑えられているのは、デパートの配慮によりフロア賃貸料が一般の賃貸料より坪当たり1,500円安く賃貸しているからとのことでした。

次に利用状況ですが、市民への周知が図られ、とくに高齢者サークルを中心に子育て世代の利用が増加し、現在1ヶ月間に3,000人の人が利用しており、年間65,000人の利用者を目指している現状でした。

最後に、今後の課題については、藤丸デパートにおいて専用駐車場を確保することが困難であることから、デパートを含め有料の民間駐車場を使用するしかないことなど利用者の駐車場確保があります。さらに、夜間利用者の拡大も課題ですが、藤丸デパートは午後7時で閉店するため、午後7時以降の活用方法の検討も必要になっていました。

【市民と一緒につくる新図書館について】

帯広市の旧図書館は、建築後約30数年を経過したそうです。図書館の基本理念である「市民のための図書館」への志向のなかで、人口17万5000人の市民に行き届いたサービスをするには、サービス拠点の再編整備とともに、中央図書館の充実が求められておりました。

なぜなら旧図書館は、開架書庫のスペース、市民が集う集会・研修施設・駐車場・メディア利用の情報機能等に対応していない状況にあり、図書館は狭隘、老朽化が著しく、更に時代の変遷と共にマスメディアの発達等により市民の図書館に対する要望が多様化、高度化し市民が求める資料や情報を速やかに提供するという図書館本来の機能が果たせなくなり図書館の利用者も低下したそうです。

このようなことから市民が求める現代社会にマッチした新図書館の建設が急務になり、平成11年に基本構想が策定され、市民利用を重視し、計画から運営まで市民参加型の帯広新図書館として、平成18年3月にオープンしたそうです。

建物は赤レンガ造りで地上3階地下1階延べ床面積6545㎡と大きく、館内は吹き抜けで、自然エネルギーを多く採用し、ガラス天井からの自然採光により明るく、太陽光発電装置、地熱を利用の空調システム等、環境に配慮したものとなっております。

また、障害者や子供、高齢者に優しい建物であり、1階は賑わいのフロアで、開架図書、児童図書、授乳室や、児童トイレ、ふれあいコーナーやお話室・案内貸出カウンター近くには自動貸出カウンターが設置されております。2階は地域行政資料に関する書籍や地元出身の歌人中条ふみ子さんの資料室などもあり、3階は憩いのフロアで障害者の働く場として喫茶コーナーや、読書テラス、ボランティア室があり多くのボランティアの皆さんが多方面に活躍されているとのことです。

図書館活動の歴史を遡ると大正2年に町民有志によりリヤカー配本の移動図書館が走りだそうです。戦後は車で18ヵ所への移動図書館活動が始まりで、市民文庫や地域コミティーセンターに図書室を開設するなど市民との協力、協同によりこれまで運営され今後も市民に身近な図書館として歩いて行くとのことです。

【北彩都あさひかわ整備について】

旭川市は人口356203人（平成20年3月末現在）で、北海道第二の都市。そこで展開の「北彩都あさひかわ整備」は、いわば「旭川市の顔づくり」事業です。

事業の概略は、①駅周辺土地区画整理事業（区画面積86ha、平成8～26年度）②JR旭川駅周辺鉄道高架事業（3.5ha、平成10年～23年度）③都市計画道路大雪通整備事業（850m、平成16年度に完成）④都市計画道路永隆橋通橋梁整備事業（430m、平成15年～22年度）⑤都市計画道路昭和通整備事業（780m、平成16年度～24年度）ほか、福祉センター（愛称「おびった」、5692㎡、平成14年度完成）、旭川科学館（愛称「サイバル」、5800㎡、平成17年度完成）に加えて、周辺を流れる忠別川河川空間整備事業（約2km、平成10～20年度）です。

総事業費は当初の1140億円が膨らみ、現在1200億円。さすがに北海道第二の都市です。その半分の600億円は駅の高架事業費です。ほかに土地区画300億円、都市計画街路が250億円、ほかに都市公園整備に50億円と言う配分でした。

【旭川駅周辺計画及び駅周辺開発について】

北彩都あさひかわ整備の一環としての整備ですが、鉄道と川で分断された南北市街地の一体的な整備が事業の柱です。昭和62年の国鉄民営化によって、駅周辺の国鉄用地払い下げから生まれた整備計画の具現化でもあり、新駅が現在地より後方に移ることで駅前広場が拡張され、新しい市民交流の場になると言います。

鉄道の高架は1階部分に新たなスペースが生まれ、駅前や就寝市街地の活性化にも結びついていくはずです。その新駅開業は平成23年度になります。

【くじらのまちづくり推進について】

鯨の食文化に関する事業は、民間を主体に熱心に行われており、それを行政がバックアップしていました。普及、啓発のためのレシピの作製などを見習うところがあるのではないかと思います。

一方、釧路は過去において鯨が地場産業として育たなかったためか、われわれが望む沿岸商業捕鯨再開に向けた取り組みが薄いような印象を受けました。

21年度には釧路市で「全国くじらサミット」が開催されると聞きました。昨年の石巻サミットを範にしたいと話されていました。出来ることは協力すべきです。これを機に商業捕鯨再開の機運が盛り上がることを期待するものです。

【釧路川リバーサイド整備について】

釧路川リバーサイド整備事業は、北海道が実施する、河川改修事業と連携を取りながら、市域内の河畔に潤いと、豊かな水辺の特性を生かした(散歩道)プロムナード等を築造するなど、河川環境の整備を一体的に行っていました。物揚場整備とともに連携を図ることにより、漁業者と市民が共存する個性的で潤いのある親水型都市空間を創出することが目的のようでもありました。

釧路市の地形は、石巻市と『そっくり』で、河口の西側には、魚市場、重要港湾の機能を有しており、その背後地には、製紙工場があります。河口には平成元年『フィッシャーマンズワーフ』があり、そこは石巻市で言えば門脇岸壁付近です。また数キロ川を上ると運河公園もあります。河口から1本目の橋は『幣舞（ぬさまい）橋』という、石巻市で言うと内海橋付近から、川の物揚場として10メートルから20メートルの栈橋が造られておりました。そこから、上流へ、石巻市で申しますと内海橋のたわらやレストラン跡から住吉～石巻大橋の根元まで一直線に栈橋が造られておりました。その栈橋の後方には現況にあった堤防を1メートルの高さにし、その堤防の裏には漁業者と市民が利用できる駐車場が整備されていました。

また、橋のもと付近にミニ公園2ヵ所が設置され、市民にとっては四季折々の景観を歩きながら楽しめるように演出し、また住民や関係機関との連携による効果的な維持管理を目指していました。

そして平成25年まで『あずまや』『イベント広場』などを計画の予定で、さらに船着場、都会の森構想があるそうです。

都会の森には、自然林、芝生公園、自然観察小屋、散策路の計画があると説明を受けましたが、財政難の石巻市では考えられないことでした。

【交流センター整備について】

世代や地域を越えた市民のための活動及び交流の場としての拠点をつくってほしいという願いがアンケートの結果に出ており、行政としてどう対応するか、合わせて中心市街地の活性化を検討に入った時、藤丸デパートのフロア再配置計画により8階フロアが余剰になったことから、借上げすることを決定しております。この決

定の根底にあるのは、市民も行政も、明治時代からの老舗であり、帯広市唯一のデパート、道東唯一の藤丸デパートを、この街から失いたくない、今後も守っていきたいという、市民の厚い思いが行政を動かしたのではないかと感じました。

やはり、行政が市民の要望にこたえ、事業を起こす時、市民の要望の根底にあるのは何かを理解し、最小の経費で最大の効果を上げるために、行政と議会が知恵を出し合うことが、市民生活の向上に繋がる最短距離であることを強く感じました。

【市民と一緒に作る新図書館について】

建設費総額35億円のうち、市民公募債として3年間で23億円を調達しました。また、新しい図書館が建設されるという動きがあつてからの10年間で、現金8500万円のほか、本1500万円の寄付もありました。それは、図書館に対する帯広市民の関心の高さを示すものです。

また、おびただしいボランティアの人たちが図書館運営を支えていることに驚愕しました。石巻市図書館でも、その活動はあるものの規模が違っていました。数値的には図書館友の会所属には109人がいて、ハンディキャップサポート、お話、製作、製本、集い、フロア、広報の各部門で活躍している以外に、個人ボランティア（3団体、4個人）がいて、図書の宅配や録音図書の製作などのお手伝いをしていました。この市民運動は一朝一夕では生まれにくいことも事実で、新しい図書館づくりではボランティアの輪の拡大が不可欠な要素であることを、強く感じました。

【北彩都あさひかわ整備について】

総事業費が1200億円とは驚きです。この財政難の時代に、後年度負担にならないのだろうかなど心配もしましたが、北海道第二の町の底力でしょうか、うらやましい限りです。ちなみに平成20年度の一般会計当初予算は1464億円で、市税は419億円。石巻市と比べどちらも2.3倍前後多く、スケールメリットを生かしている感じがします。

石巻市の中心市街地を網羅するような86haという旭川の駅周辺の土地区画整理事業に、「今の時期になんでできるの」という疑問がありました。それは現実でした。しかも、メインの通りは駅と川をまたいで新たに2本の恐竜を建設して抜かせようとする、大事業です。石巻市では内海橋一本も改修できずにいると言うのに、羨ましい限りです。

【旭川駅周辺計画及び駅周辺開発について】

駅前周辺はその町の顔です。3年後に旭川の駅前が大きく変貌するでしょう。高架事業の姿が目に見えるようになった今、旭川では駅舎と駅前の広場をどう組み合わせ、市民が集える場にするか。大変興味深く感じました。35万人の町としては、結構背の高いビルが駅周辺に集中していますが、それでも郊外へ大型ショッピングセンターが相次いで開店し、中心市街地は押され気味にあると言います。

大型投資すれば、全てはうまくいくとは思わないまでも、北海道第二の都市の大型投資の行方は、何か期待を膨らませます。それは羨望なのでしょうか。それとも、「もろもろの宿命を抱える地方都市」の一員としてのエールなのでしょうか。いずれにしても、その成果を数年後に見たいと言う希望を、案内してくれた市の職員に伝えてきました。

7 調査による石巻市への政策提言等について

【くじらのまちづくり推進について】

本市においては、今後とも全国の鯨の町と連携をはかり、国への働きかけを強め、商業捕鯨再開にむけて取り組んでゆかねばならないと思います。来年の釧路サミットに大きな期待をいただくものです。

【釧路川リバーサイド整備について】

さて、今まで石巻市でどうだっただろうか、石巻市では都市郊外で土地区画整理事業が行なわれはしましたが、市街地での再開発事業は皆無に等しいものでした。平成11年には江戸村構想などもありましたが、途中で立ち消え、これだけではなく8字回遊構想、湊地区での再開発も「地権者不在」で何もできずに今に至りました。

最近、石巻市でも新しいニュースとして本年20年末に策定される『北上川水系河川整備計画』が聞こえてきました、釧路市より遅れましたが、しっかりと将来を見据えて、『石巻市に住んでよかったなあ』と市民が自慢できるよう、市民と行政がしっかりと手法を考えることが重要であります。そして中心市街地活性化基本計画と連携することでもっと良いものができると思うのです

【交流センター整備について】

本市においては、新庁舎活用計画の中で市民交流スペースの設置や、中心市街地活性化基本計画の中では、地域交流センターの建設等が計画されておりますが、これらの計画が実現するためには、帯広市のように市民の皆さんがさまざまな活動を通して交流し、相互の連携と協働のもと石巻市に住み続けたいまちとなるよう、市民と共に情熱をもって育てていく施設であることを、市民への周知を図ることが大事であります。

そのためには、第一に市民アンケートを実施し、市民ニーズの把握、第二に、専用駐車場の確保、第三に、施設利用料金の無料化、第四に、備品等の無料化、第五に、市民活動アドバイザーの設置、第六に、夜間利用時間を午後9時まで、以上6点に留意することが必要であることを、提言いたします。

また、中心市街地における市民活動の拠点として施設を設置し、石巻市を訪れる皆さんにも喜ばれ賑わいのある、中心市街地であり続けるための中心施設となることを目指すべきであります。

【市民と一緒につくる新図書館について】

本市の人口は帯広市にやや近い約16万7000人。石巻市図書館はすでに築約40年、帯広市図書館より10年も長く経過しております。また、合併してはや3年を迎えていますが、石巻図書館と旧6町の図書館分館と旧市内の4つの公民館図書室は真に多くの市民のために行き届いた資料や情報のサービスの提供が十分なのかどうか。

図書館のサービス網の充実は石巻図書館を核として、6地区に配置している地域図書館分館ほかとのネットワークシステムの構築にあると思います。このことから図書館サービス網の整備においては、石巻市の図書館を中央図書館として将来の全域的な図書館サービス網を前提としたネットワークセンターとしての機能を早急に整備することにあります。そのうえで財政上可能であれば、帯広市のような中央図書館としての機能を十分に果たす新石巻図書館の建設が望まれます。

現在の市庁舎の跡地に公民館と図書館の複合施設を建設するという計画がある中、市民の声を聞きながらその実現を目指すべきです。建設以前からの市民参加が、完成後の市民参加型図書館につながるからです。

【北彩都あさひかわ整備について】

今、石巻市では中心市街地活性化に向けて、主要な事業の絞込みをしていますが、旭川の整備規模を見ると、どう夢を広げようとしても、旭川との比較では“陳腐さ”は否めません。

しかし、「石巻市の顔づくり」としては、今できる最大限の努力をすべきです。大規模な土地区画整理事業まで行かずとも、民間の開発意欲を引き出しながら、面的整備にも手を加えるべき。その点では、北上川の無堤防地区の解消工事に合わせた内海橋の改修、旧丸光ビルのある街区の再開発などには、是が非でも取り組んでほしいものであります。

【旭川駅周辺計画及び駅周辺開発について】

石巻市の駅前には来年9月中には「市役所」が移転します。現在開業中の市役所ビル1階の商業施設との関連で、人が集う期待があります。しかし、期待が空回りする危惧を捨てきれない。何しろ、市民の中心市街地離れは、極端に進んでいるからです。

戻っていただくために何をすべきか。まず、市役所に人が集まる仕組みを作ることです。中心市街地のカルチャーセンター（河北カルチャー、ペアーレ石巻）と連携した催事ホールの設定で、マナビスト（学ぶ人）たちの回遊を図ることも大事です。この際、駅前広場のレイアウトを考え直し、緑を拡大し、市民がゆったり過ごせる空間を創ることも必要であります。

8 調査経費
758,732円

9 添付書類
別紙のとおり